

ります。第一線で活躍している諸外国の多くの研究者と直接話し合い、顔見知りになることで、論文のやりとりを通してだけでは得難い有形無形の効果がその後の研究活動においてあらわれます。できるだけ多くの会員にその機会を提供することも大変重要なことだと思います。

研究の成果や過程についての発表や討論は学会にとって最も重要な活動の一つであります。申すまでもなくそれらは主に機関誌（天気、気象集誌、気象研究ノート等）と講演会（春、秋の大会、月例会、その他各種研究会等）によって行われています。春秋の大会での口頭発表数は20年前の～150件から今日では～250件に達しています。大会の期間や会場数の制約のため、心ならずも1人あたりの発表件数の制限や1件あたりの発表時間の短縮などせざるを得なくなっています。質疑討論の時間も不足し、これらに不満をもらす会員も多いときいています。発表様式について今後さらに工夫し改善しなければなりません。既に皆様御存知の通り、今年の秋季大会は11月7日～9日那覇市で開催されます。沖縄支部会員の方々の御尽力に感謝すると共に初めての沖縄大会が盛会になることを願っています。これを機会に、今後、これまでのいくつかの大都市のみに限らず広く各地で大会が開かれるようになることを期待しています。一方、気象集誌はその掲載論文篇数～50、頁数～500の20年前から、今日では～80篇、～1,000頁へと増大し、質的にも向上しました。20年前までは10%にも満たなかった外国からの投稿論文も1970年代以降20%代に達し、国際誌

JMSJ としての評価も高まりつつあります。気象学においては基礎と応用はいわば車の両輪であり、両者が相互にフィードバックしながら発展してきたことを考えると、最近、応用的・技術的分野の研究発表が少ないように思えることがいささか気がかりです。もっとも、それらは気象学会以外の場でも発表されるのでしょうが、もっと賑やかになって欲しいものです。大変重要な「天気」、「気象研究ノート」、夏季大学をはじめとする教育と普及活動等については紙数の都合上別の機会にふれることにします。

私達をとりまく環境は学術的にも社会的にも早いテンポで動きつつあります。気象学会はこれらに対処し、学術的立場からリーダーシップを発揮するためには学会の足腰も丈夫にしなければなりません。即ち組織と財務を健全なものにすることが不可欠です。数年前、気象庁職員の定年退職者の激増などのため、会員数の減少が懸念されましたが、多様な職種の新入会員増によって、その心配はなくなり会員数は1988年10月現在4,386名であります。一方、年間予算は1億円に達し、これまでの家内・手作業的事務体制の改善がはかられねばなりませんし、日常的活動を支える委員会制を強化しなければなりません。とはいえ、学会は基本的に会員個人の学問的興味・知的好奇心と熱意に基づく切磋琢磨の場であり学会の発展はひとえにそれら個人の創造的活動に依存しています。学会の運営についても皆様の御意見をどしどしお寄せ下さい。



Micro burst の発見に成功し、 航空機の墜落を防止した！

1988年9月8日付のデンバーの新聞によれば、昨年から行われている Doppler Radar を使用した micro burst を探知し、航空機の安全を計る project で、7月11日に

micro burst を発見し、即座に、着陸や離陸をしようとしている航空機に通報し、非惨な航空機事故を未然に防いだ、ということである。